

< ロシア旅行の魅力 >

夢に見たエルミタージュ

私は長年、日本ユーラシア協会（旧日ソ協会）京都府連の役員をしているが（現在は府連副会長）毎年「手作りのロシア（旧ソ連圏）旅行」はこれで6回になる。最初は「ソ連が崩壊して治安も心配でとても観光どころではなからう」といった状況を心配していたが、やがて「もうそろそろ旅行もできるのではなからうか」と思いつつ理事会で話をもちだしていたところ、ユーラスツアーズからの企画提案もあり、まずはあこがれのサンクト・ペテルブルグ旅行の企画がもちあがった。

なぜサンクト・ペテルブルグなのか。何よりもエルミタージュ美術館！そして第二次世界大戦期にナチス・ドイツ軍の900日にわたる包囲に耐え抜いた「英雄都市」！そして1917年、レーニンの率いるボリシェビキの革命拠点となったレニングラード！サンクト・ペテルブルグは私にとっても憧れの都であった。

行ってみて（じつは2002年と2007年2回行っているが）期待は裏切られることはなかった。参加者の中には抑留経験のある人やソ連時代に留学経験をした人もいて最初にタシケント経由でサンクト・ペテルブルグのプルコヴォ空港に着いたとき「もうこれでいつ死んでもいい。思い残すことはない」というSさんの言葉が今も心に残っている。

エルミタージュ美術館、900日にわたるドイツ軍包囲に下で60万人もの餓死と戦死者、それを弔うピスカリョフ墓地、栄華を極めた夏の宮殿やエカテリーナ宮殿、ゆったりとした企画で十分にロシアの風土と芸術を満喫した旅であった。

シベリアの大地

2004年のシベリア旅行も思い出に残る旅となった。ウラジオストックからイルクーツクへ、バイカル湖クルーズ、イルクーツクは農奴制にもとづく皇帝の絶対専制を廃し、新しい社会をつくらうと行動してシベリア流刑となったデカプリストたちの歴史を刻む街。リストピャンカ村のバイカル湖を見下ろす小高い丘にある日本人墓地では祖国をはるか離れて故郷を思いながら無念の死をとげた当時の抑留者の墓前に祈った。シベリア鉄道の旅の一夜も印象に残る。

キエフ・ヤルタの旅、バルト3国の旅

2005年夏のキエフ・ヤルタ・オデッサの旅も思い出に残る。「戦艦ポチョムキン」の映画に出てくる「オデッサの階段」、歴史の街・キエフ。

そして翌2006年はバルト3国。まずはリトアニアから。ロシアとは違ったヨーロッパ風（歴史的にはハンザ同盟などドイツの影響や北欧バイキングの影響もある）の町並みと商業で栄えた史跡が残されている。カウナスはユダヤ人を救った杉原千畝の旧領事館も訪問。しかし何よりも強く感じたのは「ソ連は我々をナチスドイツから解放したのではなく新しい支配者として現れた」という民族意識の高揚であった。ソ連崩壊後の独立の達成とヨーロッパの一員としての誇り高い出発。新しい国づくりの息吹を感じた旅であった。

ロシア旅行の魅力・その1 添乗員・金森千鶴子さん

我々のロシア旅行が毎回20～30人で多くの固定客を持っているのは理由がある。それは添乗員の金森千鶴子さんである。金森さんはユーラスツアーズの添乗員だが、学生時代からソ連留学の経験を持ち、添乗員としては飛び切りのロシア通である。だから、バスの中での「ロシア紹介」は現地ガイドに劣らないとても魅力的なお話を聞くことができる。最初のサンクトペテルブルグでは金森さんの企画で「ドストエフスキーの『罪と罰』の町並みを歩く」日程が入った。昨年（2007年）の2度目のサンクトペテルブルグ旅行では、現在市庁舎として使われている（プーチン元大統領も執務した）スモリーヌ修道院に入って「ロシア革命時のレーニン執務室」などの見学も実現した。

ロシア旅行の魅力・その2 参加者による「ミニ講座」

ロシア旅行参加者のなかで他の旅行企画と違うのは「ロシア研究者」の参加である。日本ユーラシア協会京都府連の現会長の長砂実関西大学名誉教授をはじめ、副会長の芦田文夫立命館大学名誉教授、前会長の小野一郎立命館大学名誉教授や理子夫人（神戸大学名誉教授）、中野一新京都大学名誉教授など、主に経済、ロシア語（ロシア文学）研究者で若手の方も参加される。

そしてバスでの「ミニ講座」では指名された人が自分の経験や研究成果の（わかりやすい）お話やそれぞれの自己紹介をされる。「へえー、そうだったの」と感心しながらのバスの旅は時間を忘れる。今年（2008年）3月のウズベキスタン旅行では参加した西川禎一さんの人形劇「お一人座」をホテルのレストランで上演していただいた。これも参加者一同感激したお芝居であった。

